

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00922

研究課題名（和文）古代末期西方セナトール貴族のローマ支配離脱過程－内戦の分析を通じて－

研究課題名（英文）Civil War and Detachment of The Western Senatorial Aristocracies from Roman Imperial Rule

研究代表者

小坂 俊介（Kosaka, Shunsuke）

愛知教育大学・教育学部・講師

研究者番号：10711301

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、4世紀後半～5世紀西ヨーロッパの地方有力者層が、帝国内戦とその戦後処理を契機として皇帝権力から離反し、ローマ帝国支配体制から離脱していった過程の解明にある。研究から得られた成果は主に次の2点である。第一に、5世紀初頭の北アフリカにおける内戦の戦後処理から、敗者の記憶の形成と地方有力者層によるその政治的利用の具体相を解明した。第二に、同時期のガリア南部教会政治と皇帝による干渉をめぐる、特に司教人事への介入に関して、その時期と人選理由を解明した。その他、後期ローマ帝国の政治的意思決定機関であった「コンシストリウム」をめぐる問題、またヨルダネス『ゲティカ』の翻訳にも取り組んだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、ローマ帝国の「衰退」をめぐる近年の研究動向のなかで、その要因としての内戦という理解に実証的裏付けを与えた点がある。とりわけ日本語圏の研究では、帝国衰退の要因をいわゆる「蛮族」に代表される帝国外部集団に注目する傾向がある一方、同時期の内戦はさほど重視されていない。本研究はこのような状況を補う。また4世紀末～5世紀初頭の限られた時期に留まるものの、地理的に近接する北アフリカと南ガリアについて内戦後の政治的・社会的状況の違いを浮かび上がらせることもできた。ローマ帝国の「衰退」は社会的にも関心の高いテーマであり、本研究はその需要に応えるための基盤としても機能する。

研究成果の概要（英文）：This research aims to trace the detachment process of the Western local aristocracies from the Roman imperial system in the late 4th to the 5th century, focusing on civil wars and their aftermath. The research has two main results. First, it clarified the formation process of the memories of civil war losers. In the case of the revolt of Gildo in the early 5th century, local elites like bishops could arbitrarily degrade their political enemy using the image of Gildo. Secondly, the research clarified the imperial intervention in the church politics of southern Gaul in the early 5th century. Investigating the canons of the church councils, papal letters, and the Gallic chronicle has clarified the reason why the emperor chose particular persons for the two metropolitan sees. In addition, I have clarified the terminology of "consistorium" in the sources from the second to the sixth centuries.

研究分野：古代末期ローマ史

キーワード：ローマ帝国 古代末期 ガリア 教会会議 司教 内戦

1. 研究開始当初の背景

前2世紀には地中海世界全体を覆う帝国へと成長したローマ国家は、傘下の地方有力者層に対する特権・恩恵付与と引き換えに帝国支配への貢献を求め、彼らを自らの支配体制に統合していった。こうしたシステムは後4世紀後半のヨーロッパ西方において急速に瓦解し、地方有力者層は帝国外から到来したゲルマン系集団との提携を通じて新たな政治秩序を模索することになる。このような地方有力者層と皇帝権力を統合していた結びつきを解いた要因が、いわゆる「ローマ帝国の衰退」をめぐる研究が2000年代に再び活性化するなかで解明されるべき問題と認識されている。

そうした要因の一つとして近年注目されているのが、4世紀後半から5世紀にかけての帝国西方において繰り返された、皇帝位をめぐる内戦である。それは軍事力の消耗を招いたばかりでなく、その対処療法としての臨時課税・負担増を通じて、社会の資源を消耗させる結果となった。さらに内戦の戦後処理は一般に、勝者による敗者の政治的・法的決定の抹消、その権威の一方的否定を伴ったため、地方政界の勢力図を一方的に変革する危険性を孕んでいた。そしてその影響はキリスト教会にも及び、教会内政治や教理形成の行く末をも左右した。このような政治的状況のなか、地方有力者層にとって皇帝権力への協力は次第にかつてのような魅力を失い、帝国支配体制からの離脱につながった、との筋書が描かれつつある。

しかしながらその筋書は、ゲルマン系集団の到来に帝国衰退の要因を帰す学説に対する反論として提示された側面があり、必ずしも実証的史料分析に裏付けられているわけではない。地方有力者層が自らの上位権力としてのローマ帝国支配体制から離脱していく過程を正確に理解するためには、内戦後の皇帝権力による戦後処理の実態を把握した上で、聖俗両面において現地社会の指導的存在であったセナトール貴族に注目し、内戦前後におけるその政治的帰趨を解明することが必要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、4世紀後半から5世紀にかけてのヨーロッパ西方における地方有力者層であったセナトール貴族が、内戦とその戦後処理を契機として皇帝権力から離反し、ローマ帝国支配体制から離脱していった過程を解明することである。そのために、これまで主に教会制度史・教理史の分野で活用されてきた教会内文書(教会会議決議録や教皇書簡)を、内戦に対する地方有力者層の対応策を探るために分析する。4世紀初頭のローマ帝国による公認以来、セナトール貴族のキリスト教化が進む。彼らは教理や教会組織の確立をめぐる諸問題の調停のため、しばしば世俗の皇帝権力に協力を求めた。こうして教会は世俗権力との結びつきを深め、その変化に敏感に反応するようになる。この歴史的背景を反映する教会内文書の性質に着目することで、当該時期における地方有力者層の政治的利害関係と動向を見極める。

3. 研究の方法

研究の根幹は法令史料、プロソポグラフィ(人物誌的)調査、教会内文書(教会会議決議録・教皇書簡)の分析である。

(1)内戦が現地社会にもたらした政治的・社会的混乱の具体的様相を解明するために、4・5世紀の皇帝勅法を収める『テオドシウス法典』『ユスティニアヌス法典』から、内戦の前後に発布された法令を網羅的に分析する。加えて、5世紀の個別勅法集成(『ウァレンティニアヌス新法集』『マヨリアヌス新法集』)も対象とする。これらの法令史料のうち、内戦の戦後処理として発布された法令をそれ以外の法令と比較分析し、内戦後の社会で皇帝権力が対応しようとした問題の性質を明らかにする。

(2)プロソポグラフィ的分析においては、帝国内戦の前後で、現地有力者層内部の勢力図に変化が見られるかどうかを調査する。先行研究が作成した人物名鑑に依拠しながら、地方政界・教会組織内における内戦前後の政治的勢力変化を抽出する。

(3)ヨーロッパ西方社会の地域別動向を反映する史料として、教会会議決議録と教皇(ローマ司教)書簡を読解する。ガリア・ヒスパニアに関しては、4世紀後半から5世紀にかけて当該地方にて開催された教会会議決議録を分析する。これらの教会会議では教理問題に加え、各司教の管轄領域や教会内ヒエラルキーの問題が論じられた。そうした問題はローマ帝国行政区分の変動と密接に関連していたため、教会会議決議録からは、帝国支配権力に対する各教会指導者集団の態度を読み取ることが可能である。またイタリアに関しては、当該時期に在位した教皇たちの書簡を読解する。彼らは西方ラテン教会の長を自認し、地方教会内の主導権争いにしばしば書簡を通じて命令した。また教会組織の独立を維持すべく、ローマ皇帝権力との政治コミュニケーション

ヨンに腐心した。そうしたローマ司教たちの書簡を読み解くことで、内戦時の複数の皇帝権力と地方教会という利害関係者のなかでの彼らの立ち位置とその動向を解明する。

以上の個別的史料分析を内戦の局面ごとに総合することによって、4世紀後半から5世紀にかけての政治史再構成を主要な軸として、内戦後のセナトル貴族の政治的対応の諸相を解明する。そして皇帝権力と地方有力者層の利害関係断絶が5世紀初めの前後で表面化し、ヨーロッパ西方の地方有力者層がローマ帝国支配から離脱していく過程を描き出す。

4. 研究成果

(1) 内戦の勝者による敗者の「記憶の断罪」とアウグスティヌスによるその利用

内戦に最終的に勝利した皇帝は敗者を貶めるべく、後者の統治行為を全て否定する法令を發布するのが通例であった。それらの法令には類似の内容を繰り返すものや、追って例外事項を定めるものがあり、敗者の治績の否定がしばしば地方レベルでは混乱を招いたことを推察させる。また、そのような治績の否定は現代の研究者が「記憶の断罪 (damnatio memoriae)」と呼ぶ、内戦の敗者を忌まわしい存在として社会に記憶させる慣習の一環でもあった。内戦の勝者は法令に加えて称賛詩・演説のような媒体を通じて勝利を寿ぎ、敗者を貶めようとした。そうした史料からは作成者たる皇帝権力の意図が読み取られるものの、勝者のメッセージを地方有力者層がいかに受容したのかは多くの場合不明である。

地方有力者層の動向を例外的に知ることができる事例は、5世紀初めの北アフリカにおける武官ギルドーの反乱である。ギルドーの敗北後、時のホノリウス政権は複数の法令を通じて彼の所領を没収するなどの対応を行ない、種々の媒体を通じてギルドーの名声を貶めた。このことは北アフリカ教会政治のなかで、ギルドーの協力者とされた「ドナティスト」陣営に対する攻撃材料ともなった。北アフリカの司教アウグスティヌスは反ドナティストの立場で論陣を張り、敵対陣営を貶めるべくしばしばギルドーを引き合いに出した。この事例から、地方有力者層は帝国中央から発せられた政治的メッセージを敏感に察知し、勝者の立場にある限り、自らに都合よく利用していたと考えられる。

(2) 皇帝による教会政治への介入とその帰趨

皇帝という帝国最高権力者の交代は、地方レベルでの教会指導者である司教の交代をも左右しえた。4世紀後半のローマ帝国におけるキリスト教徒の増大ゆえ、司教はキリスト教徒の指導者であると同時に、都市民衆の指導者としての役割を得ていったからである。そのため皇帝は時に司教人事への干渉を通じて、特に属州首都レベルの大都市の支配を確実にしようとした。

410年代のガリア南部教会政治における、新皇帝コンスタンティヌス3世の介入はその一例である。コンスタンティヌス3世は407年にブリテン島にて皇帝に推戴されたのちガリアへと渡り、408年までにアルルを本拠地とすると、その教会の新司教に自身の息のかかった人物を配した。また近郊の有力司教座であるエクスにも同様の介入を行なったとされる。先行研究はこの事例を皇帝による教会政治への干渉、あるいはガリア南部教会の主導権をめぐる司教どうしの抗争の一環として位置付け、その具体的過程を明らかにしようとしてきた。ところがその司教の人選に関して、なぜ新皇帝がその人物を選んだのか、これまで明確な説明がなされてこなかった。

本研究はこの問いに対し、司教に選ばれた二名が380年代以降の教会政治史においていかなる立場にあったのかを考察することで答えようと試みた。その際には先行研究においても利用されてきた史料、特に390年代末の北イタリアの都市トリノにて開催された教会会議議録と教皇ゾシムス(在位417-418)の書簡集、そして作家スルピキウス・セウェルスの歴史叙述を讀解した。さらにこの事件にまつわる重要な典拠とされてきた『452年のガリア年代記』の解釈をめぐって、近年の最新の研究成果にもとづいて記述を読み直した。その結果、コンスタンティヌス3世による司教の人選理由は、380年代以降のガリア南部教会政治における二人の政治的孤立に求められることが判明した。さらに、コンスタンティヌス3世による教会政治への干渉は従来説よりも遅い時期に修正すべきことも判明した。地方エリート層たる司教たちのなかには、内戦の敗者となるリスクを避けるべく皇帝権力から距離を保った人々もいたと考えられる。

(3) 「コンシストリウム」なる語の用例分析とその空間的語意

後期ローマ帝国の政治的意思決定においては、「コンシストリウム」なる組織が皇帝の助言者集団として重要な役割を担っていた。その活動については多くの史料が伝えるにもかかわらず、その組織の実体や開催場所などをめぐっては不明な点が多い。本研究では2世紀から6世紀までのラテン語・ギリシア語史料にあらわれる「コンシストリウム」の語に注目し、その語が人的集団を意味するのか、それとも宮廷内の一室を意味するのかを検証した。多くの場合明確に語意を確定させるのは困難であったものの、「コンシストリウム」はその語の初出である2世紀から6世紀に至るまで空間を指す言葉であり、そこから会議を指す語意に転用されたことを確認した。

(4) 加納修氏(名古屋大学教授)と村田光司氏(筑波大学助教)と共同で、6世紀の歴史家ヨルダネスの作品『ゲティカ』の翻訳と註釈作成に取り組んだ。この作品は古代末期ローマ帝国政

治史において極めて重要な役割を演じたゴート人の起源にまつわる歴史叙述であり、4世紀後半から5世紀を扱う本研究においても重要な情報源となる。研究期間中には全体の三分の一ほどにあたる部分を翻訳し、公表することができた。

本研究からは以上のような成果を得たが、当初研究計画にて予定していた、セナトール貴族の帝国支配からの離脱過程の解明にまでは至らなかったことを断らなくてはならない。研究期間中に検討対象とした4世紀末から5世紀初頭の西方社会においては、セナトール貴族はしばしば対立する皇帝の一方を支持し、そのために敗者と末路を共にしていた。このことは彼らが依然としてローマ皇帝権力との政治的結びつきを維持していたことを示す。本研究から浮かび上がってきたのは、当該時期に帝国支配からの離脱傾向を見せるのはセナトール貴族ではなく、より地方社会に根差した有力者層であるキリスト教司教、そしてその輩出元であった都市参事会員たちであったという仮説である。司教の担い手が4世紀においては都市参事会員、そして徐々にセナトール貴族へと移行していったことは以前から知られていたが、そのことは地方有力者層の権力を支えた帝国支配体制の衰退の結果として解釈されていた。しかしながら本研究の成果は、このような因果関係の理解に再考を迫るものとなる。今後は帝国支配体制の解体における都市参事会員とセナトール貴族の政治的動向を、帝国と教会の関係性にも注目しながら解明することが求められる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 加納 修、小坂 俊介、村田 光司	4. 巻 6
2. 論文標題 〔翻訳〕 ヨルダネス『ゲティカ』翻訳 (1)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東方キリスト教世界研究	6. 最初と最後の頁 3~57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/eoas_6_3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 加納 修、小坂 俊介、村田 光司	4. 巻 7
2. 論文標題 〔翻訳〕 ヨルダネス『ゲティカ』翻訳 (2): 67-130節	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東方キリスト教世界研究	6. 最初と最後の頁 3~57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/eoas_7_3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 小坂俊介	4. 巻 47
2. 論文標題 5世紀初頭ガリア南部における皇帝と教会政治 コンスタンティヌス3世治下の司教叙任をめぐって -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 地中海学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小坂俊介	4. 巻 新95
2. 論文標題 用語法から見た後期ローマ帝国の「コンシストリウム」 その空間的語意の確認	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 史潮	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小坂俊介	4. 巻 新95
2. 論文標題 特集にあたって(宮廷空間の世界史)	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 史潮	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計5件(うち招待講演 0件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 小坂俊介
2. 発表標題 5世紀初頭ガリア南部の教会政治と帝国内戦
3. 学会等名 愛知教育大学歴史学会2022年度大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Shunsuke Kosaka
2. 発表標題 Post-Civil War Governance in the Later Roman Empire: Investigating the Evidence from the Theodosian Code
3. 学会等名 The 12th Korea-China-Japan Symposium on Ancient European History: War, Peace and Hegemony in Antiquity(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shunsuke Kosaka
2. 発表標題 An implicit resistance to the Constantinian propaganda: The urban landscape of Rome in Ammianus Marcellinus
3. 学会等名 Pacific Partnership in Late Antiquity February 2022 Zoom Conference(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小坂俊介
2. 発表標題 後期ローマ帝国におけるコンシストリウム
3. 学会等名 第22回古代史研究会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小坂俊介
2. 発表標題 コメント(第73回日本西洋史学会大会小シンポジウム1 古代史)
3. 学会等名 第73回日本西洋史学会大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 周藤芳幸、安川晴基、河江肖剽、田澤恵子、中野智章、高橋亮介、山花京子、長田年弘、佐藤昇、師尾晶子、澤田典子、佐藤育子、川本悠紀子、芳賀京子、小坂俊介、福山佑子、桜井万里子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 464
3. 書名 古代地中海世界と文化的記憶	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Researchmap https://researchmap.jp/gokanoamo/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------